

シカの個体数を減らし、植生環境の回復を図るためにはどうしたらよいか

株式会社東北自然 ○高橋広和、西千秋、神大士

株式会社数理設計研究所 玉置晴朗、矢澤正人

岩手大学農学部 井良沢道也 群馬大学工学部 松本 健作

1. 概要

現在岩手県沿岸部において、シカの個体数の増加やシカの分布が拡大しています。農林業被害、林床植生の減少、バイオマスの低下、土砂災害の危険性の増加、水源のかん養機能の低下など、シカによって様々な問題もそれに伴い生じています。直接的な、シカの対策は地方自治体が行っておりますが、岩手県においてもシカの増加や分布拡大は防げていないのが現状です。さらに、市町村を跨いで活動するシカの対策を、一市町村だけでは解決しづらい事も大きな問題です。個体数調整は植生環境の保全や治山事業を行ってゆく上でも非常に重要な課題です。今回の発表では、シカの個体数調整に関わる捕獲方法と捕獲に関わる現状での問題点の紹介を行います。また、シカを含む鳥獣被害対策の新しい生態系システムを利用した、動物管理の方法の提案を行います。

2. 長期的な取り組みが必要

本調査地である、岩手県沿岸に位置する釜石市には、シカの生息地として有名な五葉山があり、本州最北端のシカの生息地です。かつては五葉山をシカのサンクチュアリとして活発に保護活動を行ってきました。しかし今現在は、シカの生息数は増加（図：1）しており、農林業被害の増加および、行政界を超えた岩手県の全域にまで生息地が拡大しています。生息地の拡大および生息数の増加によってシカによる農林業被害が拡大しており、シカの被害が顕著な北アルプスや北海道の様な壊滅的な植生の食害、植物生息種数の減少、植生環境の劣化、それに伴う昆虫、動物、鳥類の生息数の減少が危惧されています。

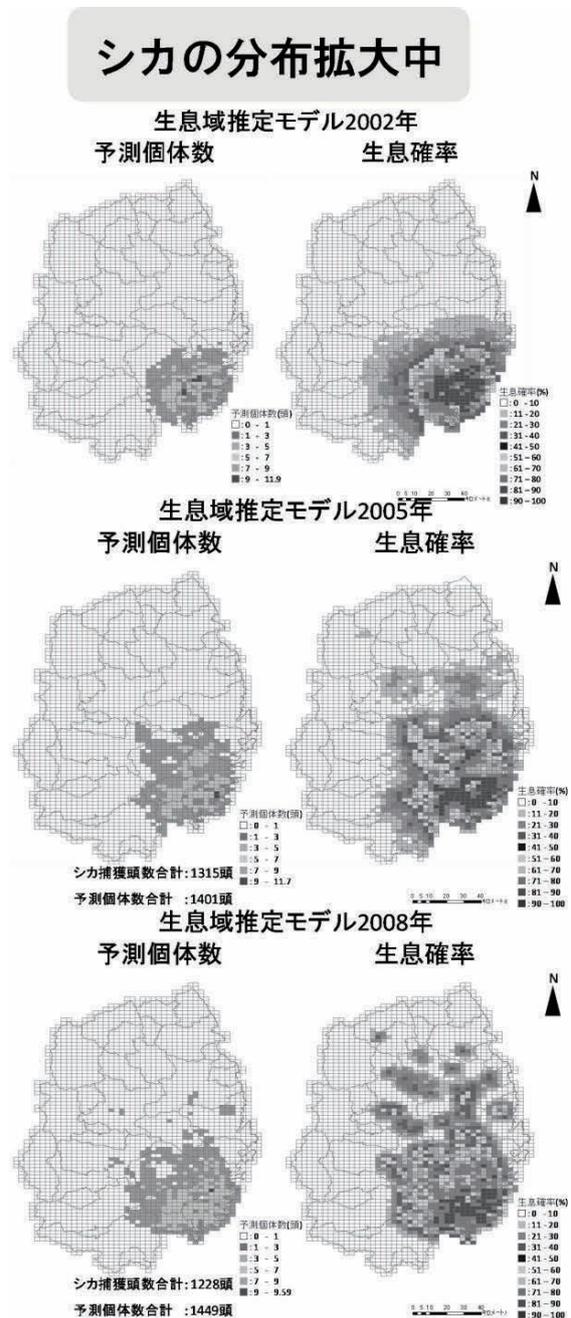


図1. 岩手県におけるシカの分布モデル

(農業農村工学会：2011, 神大士)

ある程度の、シカの個体群の減少は、地域のエサ資源の増加につながり、逆に残ったシカの栄養状態を良好にしてしまう恐れがあります。

シカの繁殖力は非常に強く、行動域も広いので、長期的なシカの個体数管理計画が重要です。

3. 捕獲に関わる現状と実際の捕獲方法

狩猟者の減少

現在、狩猟者の減少により狩猟圧が低下してきています。この問題は、シカの増加以上に大きな問題となっています。シカの増加よりも、狩猟者の高齢化による減少、および銃の規制法の強化によって、新しく狩猟を行う若い人材が非常に不足しています。

シカの捕獲について

狩猟での捕獲数、有害鳥獣捕獲でのシカの捕獲数を確保するために、捕獲区による捕獲可能頭数や猟期の違いなどを整理する必要があります。有害鳥獣捕獲は許可次第で基本的に時期や場所に関係なく捕獲を行うことができるため、積極的に有害鳥獣捕獲許可を取得し、シカを捕獲していくことが有効な手立てであり、個体数調整には必要な方法です。

シカの捕獲方法

シカは、くくり罠、囲い罠、猟銃による捕獲が行われています。各捕獲方法それぞれに利点、欠点があり、一度に複数頭捕獲できる囲い罠は有効な手段の一つであると考えられています。広い平地にシカが棲んでいる地域では、囲い罠は非常に有効な捕獲方法です。囲い罠を設置する場合、その地域に合わせて罠の大きさなどを検討する必要があります。

捕獲したシカはどうするのか？

捕獲したシカは基本的に、持ち帰るか、持ち帰りが困難な場合は埋設処理を行わなければならないルールになっています。しかし、複数頭捕獲した場合、持ち帰ることや埋設処理は困難であるために、シカを沢山捕獲できる機会があったとしても、このルールによって大よその狩猟者、または

有害駆除者は一匹のシカを捕獲または駆除した時点で作業を終了してしまいます。シカの個体数調整には、銃を使った物理的な捕獲が非常に効果的であるのですが、上記の“シカが沢山いたとしても、すでに取り替えているシカの処理があるために、それ以上は取りづらい”といった現象が起きています。シカの処理に関わるルールが、個体数調整のボトルネックとなっている可能性は高いです。有害捕獲などでは大量にシカを補殺するため、シカの処理方法を検討する必要があります。食肉処理や焼却処理、埋設場所の検討が必要である。食肉処理をすることで、地域産業にも貢献することができると考えられます。また、埋設などをする際にも、環境に配慮した、鉛を含まない無害弾を使用するなどの必要もあります。

4. 地域にあった個体数調整モデルの作成

モニタリング調査

被害の対処療法的な施策である電牧柵や防護網などに比べて、野生動物を森林に追い戻して個体数管理をするとすると、効果が現れるまでに長い時間を要します。たとえ一地域で被害軽減に効果のある対策を施行したとしても、その地域で危害を加えていたシカが方々に分散して隣接する他地域の農林産物に危害を加えることが考えられます。よって広域的かつ持続的なモニタリング調査を行うことによって現状を逐一確認する必要があります。

地域にあった個体数調整モデルの作成

他地域の駆除方法をそのまま使用するのは、環境が違うために上手くいかない恐れがあります。しかし、学べる箇所も大いにあるのです。他の地域のシカの防除および、個体数管理のための捕獲システムを検証しましょう。地域でのシカ管理モデルの作成を、地域全体で構築する事が必要です。さらに、成功事例の方法論を地域モデルとして全国に発信して行くことも、今後の止まらないシカの増加には効果的であると考えます。